始

71-547

帝國圖書館藏

珠玉抄

松本苦味著
森鷗外題辭

東京 文正堂書店 日本橋

大正
5. 3. 15
内交

目次

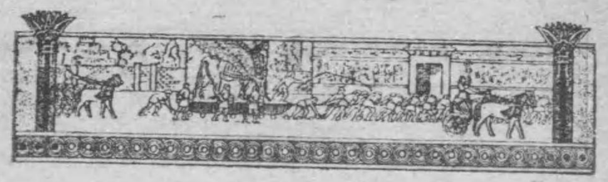
題辭……森鷗外……巻頭
ニイチエ箴言集……三
イブセン箴言集……七九
ワイルド箴言集……一五九
フランス箴言集……二二五
ムーア箴言集……三三〇

題辭

彩は織りたる錦にあるを
抜きなば奈何絲の一すぢ
さはれ細馬はその骨をさへ
千金に買ふためしもありき
尋常人の言には換へじ

フリイドリッヒ・ニイチエ

箴言集



賢しき人の謦咳のこゝろ

丙辰二月

森林太郎

フリイドリッヒ・ニイチエ

フリードリッヒ・ニイチエ小傳

フリドリッヒ・ウヰルヘルム・ニイチエは、獨逸に移住した波蘭土貴族の後裔である。彼は千八百四十四年十月十五日 Röchen の一小村で呱々の聲を上げた。教育は Pforta と Leipzig の兩大學で受けたが、學生時代から既に後年の鋭鋒を顯してゐた。――彼は何事にまれ粗野を嫌ひ、就中高談放語はその尤も嫌忌する所であつた。そのため、學生の仲間からは『小傳道師』を以て目されてゐた。

ニイチエは大學に於ては古典學を修めた。千八百六十九年齡二十六歳の時、彼はリッシエルなる人に見出されて瑞西バーセル大學の助教授となり、古代言語學を教授したが、後幾許もなくして正教授に上げられた。彼は古代希臘及び印度哲學に想ひを潛むること深く、その深淵なる學殖は、彼の理想の聖賢ツアラツーストラの口を借りて遺憾なく披瀝されてある。ニイチエは千八百八十九

年の春精神に異狀を呈し、終に瘋癲病院に送られた。爾來一たびもその理性を回復することなく、陰慘なる病院内に呻吟しつつ、千九百年八月二十五日Weimarで不歸の客となつた。强者道德を叫び、反基督主義を唱導した一世の思想家の末路も亦實に慘なるものである。

高き修養に於ては、三十歳の男兒はほんの初心者に過ぎず。小兒に過ぎず。

豐かなるたましひに仍て孚(はぐく)まれたるものにあらざれば、眞に功を奏し難し。

餘力こそ眞に力の證跡なり。

弱者は須く負くべし。――これ人道の第一義なり。

吾人はそのために援助を與ふべし。

平凡人の呼んで道義と稱するものは、時に哲學者に執つては不善虚弱を意味することあるべし。

善とは何ぞや？　人間の内に力の感覺、力の意志、力それ自身を助長せしむる一切のものの稱なり。惡とは何ぞや？　懶惰より生ずる總てのものの稱なり。然らば幸福とは何ぞや？　そは、力は增しつつあり、反抗には勝ち得たりと思ふ感覺のことなり。

心理學者は、自己保存の本能を以て有機生物の主的本能なりと斷定する前に、須く一考を要す。生物は何事をなすよりも先づ己の力を發

揚せんと欲するものなり。――乃ち、生活それ自身は力の意志なり。自己保存は只如上のものの間接的なる、又尤も僅少なる結果の一に過ぎず。

諸の秀でたる人士は、群集、多數者、群民より遠く離れて、『主權者なる群民』を忘れ、己のみは除者なりと思惟し得る城砦と閑居とを本能的に憧憬しをれり。

皮肉とは、賤劣なるたましひを有せるものが、所謂正直と稱するものに近付く唯一の形式。

孤獨は尤も少數者のなすべきことなり。
そは强者の特權也。

やれ Voltaire！ やれ人道！ やれ痴愚！
世の『眞理』と、眞理を求むることには、隨分くすぐつたきこと多し。
若しも人が餘りに道義的にそを求め行かば、——"il ne cherche le vrai que pour faire le bien"——予は思ふ、恐らく彼は一物をも得ざるべし。

總ての深遠なる思想は皆假面を要すべし。否、更に之を押進めて言はば、總ての深遠なる思想の周圍には、その發する總ての詞、その行

ふ總ての行動、その顯す總ての人生の意義に對し、絶へず虛僞淺薄なる釋解の加はるため、假面の增大し行くを見るべし。

どん詰りに行かば、あらゆる事物はその有形のままにてあるべし、又然くありたり。——乃ち、大なるものは大なるものとして存し、深淵は深きものとして存し、纖細なるもの、感傷的なるものは優れたるものとして存す。短簡に之を言はば、乃ち高貴なるものは、高貴なるものとして存する也。

我等北方人は、疑ひもなくその曾祖を蠻族に得しならん。我等の宗教に對する手腕に徵してもこれを知るべし。——吾人は宗教に對して

はまことに貧しき才能を有せり。

Aristoteは云へらく、人は獨り生きんとせば、先づ神か獣の如くあるべしと。されど、そは第三の交互法を忘れたり。

人は須く兩者を兼ねざるべからず。——乃ち哲學者にあらざるべからず。

深き痛苦は人を高め、人をして隔絶せしむ。

多くの人間の正直らしきは、彼等が虚偽的なる感情の發露を恥づるが故にあらずして、己の虚偽を巧に他人に信ぜしむる事を得ざればなり。一言に言へば、彼等は俳優として自己の技量に自信力なければなり。さればにや彼等は正道を選ぶ。

あきらめとは何ぞや？　そは病者には尤も心地宜き地位にして、彼はそを求めん爲め永く苦難し、漸く困憊して、終に發見せるものなり。

偉人を作るものは力にあらず。大なる感情の永續なり。

爾は先づ自身を助けよ。然せば諸人はまた爾を助けん。——これ隣人が他を愛する一原則。

群集には奇しけれど、猶且有要なるものとして、予は今、あるは太陽、あるは雲と、我が道を追へり。されど恒に群集の上を越へ行けり。

◆

同様の情緒は男にも女にもあり。されど、その速度に於て異れり。それが爲め、男女は何時も相互間に誤解を免る能はず。

◆

人自らの不德に恥づるは、これ軈てまたその終りに於て、彼が自らの道德にも恥づるに至る階梯なり。

◆

世に道德的の現象なるものなし。唯現象の道德的解釋はあり。

◆

賭事に愛もなく憎もなければ女の遊戯は平凡なり。

◆

人は己の行動に對し怯懦なるべからず。一度行爲をなさば、そを否認すること勿れ。良心の惱は醜し。

◆

女男性的の性情を有する時は爾を走り去らしむべし。而して彼女が何等男性的の性情を有せざる時は、彼女自身走り去るべし。

◆

蟲踏まるれば畏縮す。彼の注意の證憑なり。こは再び踏まるる機會を僅少ならしめんが爲なり。これを道德上の熟語を以て言へば『謙遜』と云ふ。

『如何にせば予は絶頂に昇り得べき？』

今は然くそれを考ふるの暇なし！

予は今昇り始めたり！

男女兩性は互に瞞着し合へり。その理は、乃ち彼等が各々己のみを尊び、己のみを愛すればなり。（更に明確に言はば、彼等は自己の意志のみを尊重すればなり。）

斯くして男は女の和平なるを望めども事實和平にあらず。女は猫のごとく一見如何にも穏かなる容子をなせども然らず。

その戀に於て、その復讐に於て、女は男よりも野蠻也。

女子にして學者肌を有するものには、性的缺陷を有するもの多し。石胎は女子をして一種の男らしき趣味に誘致す。男は、予をして言はしむれば、まことに『不姙動物』なり。

個人に於ける精神錯亂はこれ珍奇なり。されど群集、國民、一時代の精神錯亂は通例也。

『我等の同胞は我等の隣人にあらず。隣人の隣人なり』。――と斯く各國民は思へり。

憐憫は學者に對しては殆ど笑ふべき效果を齎すものなり。恰もbyclops の上に優しき手を置くが如くに。

（譯者註。Byclops は希臘神祇に顯るゝ、額に一眼ある巨人の稱なり。）

嗚呼吾人の感覺の内には、如何に妙なる感察の器能の存するぞや！

譬へば人間の鼻のごときは、それに就て一人の哲學者も未だ曾て畏敬と感謝とをもて語りたるものなけれど、差詰我等の何時にても使用し得る尤も完備せる器能にはあらずや。そは分光器さへも猶宜く省察し得ざる動作の微細なる變化までも記錄し得るなり。

——己は彼奴を好まぬ。

——何故だ？

——己は彼奴に適はないからだ。

世の中に斯く答へたるものありや？

『神』なる考へは、今日まで生存上最大なる邪魔物なりき。

吾人は神を否定す。神に對する義務を否定す。斯くしてこそ世界を救ふことを得べし。

智識の全く缺けたるものを學者と云ひつべし。

尤も忙しき時代――我等の時代は、――その大なる勤勉と、大なる富より何物をも生み出すことを知らずして、唯多々増々富を積み、瞶勉を増す。

世界は富を獲る天才より、寧ろ富を使用する天才を要しをれり。

道徳の諸方則は只諸の感情の符號に過ぎず。

生活とは何ぞや？

生活とは死にかけたるものを絶えず我等のあひだより放棄することなり。生活とは我等のあひだに於ける、また我等以外に於ける弱者老衰者の總てに對し、不變に殘虐なることなり。

されば生活とは、頻死者、困窮者、老者に對し、無慈悲なることの稱にはあらずや？ 絶えず殺戮者となるべきことにはあらずや？

さるを古のMossは言へり。『爾殺戮を爲すべからず！』と。

吾人は不名譽を負ふより、更に容易に惡しき道念を負へり。

兵卒とその統治者とは、勞働者とその主人より常に遙かに優れたる行儀を有せり。今日の社會に於ては、少くとも總ての軍隊的に基礎を有せる文明は、工業的なる文明に比し遙かに優越を示せり。後者は今日の狀態より觀ずれば、未だ曾て無かりしほど劣惡なる生活法を營むものと言はざるを得ず。

共和主義は基督教運動の餘波なり。

自尊心を失ひたる者は、最早人を指揮するの力無し。人を導くの能力無し。

社會主義的の馬鹿とおつちよこちよいとに仍て唱導されたる、例の『未來の人』てふ標準に人類全部を墮落せしむること、人類を絶對的に群居的なる獸に墮落せしめ、侏儒たらしめ、（彼等の口吻を模して言はば『自由社會』の人たらしめ）人をして均等の權利と主張とを得せしめて、人類を獸化せしむることは、是正に疑ひもなく極めて容易ならん。

されど、そのどん詰り迄も可能なることを案出せし人は、他人が到底味ひ知らざる嫌惡を知るに至るべし。——而してまた更に新なる使命を！

教養と國家、——何人もこの點に於て瞞着さるること勿れ。この兩者は互に敵手也。

あらゆる文化教養の黄金期は、政治的に衰頽を示せる時代なりき。教養の立脚地より大なりとするものは、常に非政治的なるものなり。——反政治的なるものなり。

諸〻の大なる、美しき事物は、これ一般人士の有たる能はず。——pulchrum est paucorum hominum.

吾人が基督教の信條に反對せる時は、基督教道德をも放棄せるなり。これは決して自明自白のことにあらず。かの英吉利の淺薄なる奴輩に反するには、この點は多々增々明確にして置くの要あり。

尤も力に滿てる人間は建築家なるべし。建築家は、恒に欝勃たる力の暗示の下にあり。——建築物には人の誇も、人の重力に對する勝利も、人の力に達せんとする意志も、悉く形となつて顯れたり。

最も叡智にして、また最も勇あるものは、最も慘なる悲劇を經驗すべし。されど彼等はその爲めに人生を高む。何故なれば、人生は尤も力强き反抗心をもて彼等に敵對すべければなり。

予の知れる少數の僞善者は、唯僅かに僞善を眞似るるものに過ぎず。恰も今日の人間が十人寄れば十人役者なるが如し。

ちつぽけなる政治の時代は過ぎたり。次の世紀は世界を併呑せんとする爭鬪を持ち來るべし。

——大なる政治を喚ぶ壓迫也。

今は時代趣味と德操とが、意志を弱め、意志を稀薄ならしむる時なり。——意志の薄弱程、時代精神に適合せるものはなからん。

眞理は終に女性なり。

人は眞理に對し、力を以て臨むべからず。

世には快樂、痛苦、同情などの問題より更に高き問題あり。並ての哲學の流派にして、唯それらの問題のみを扱ひ居れるものは單純なり。

一人によきものは必ずしも他人によからず。一の道德をもて總ての人間に當塡むるは、高き人間に執りては正に損失也。單簡にこれを言

はば、人と人とのあひだにも階級あり、乃ちその結果として、道德と道德とのあひだにも、自ら懸隔の存する所以なり。

人は服從の技術を學ぶと共に、また屈辱の術も學ばざるべからず。

我等の口にする所謂總ての『高等教育』なるものは、殘虐性を更に强烈ならしめ、更に精神化せしむることにその基礎を置きたるものなり。——こは予の意見なり。野獸性は決して殲滅せられずして、そは生き、そは增大し、今は只姿を替へたるのみ。

人の高きを知るを欲せざるものは、己より低き者と、前面とにのみ

一層鋭く眼を注げり。——斯くして彼は己を僞けり。

女は彼女等の孱弱き點を誇長することに極めて巧妙なり。まことに彼女等は自己の弱點を作るに巧智なり。斯くて彼女等は、あるかなしの微塵だに、猶且禍をなすがごとき纖弱なる裝飾品の如くに己を見せかけんとせり。彼女等の存在するは、乃ち男の心に男の荒々しきを反省せしめ、男の良心に訴へさしめんが爲なり。女は斯くの如くにして、强き者、萬の『力あるものの權威』に對して己を防禦せり。

基督教徒の抱きし、世は醜にして惡なりと云ふ觀念は、嬰て世を醜惡の巷となせり。

惡しき女コックにより——臺所の全く無識なるにより、——人類の進歩は永く阻止され、遮斷せられたり。今日に於ても、僅かの進歩を見たるのみ。

この一言を敢て高等の學校にゐます諸孃に呈す。

女は今日まで男により、路を失ひて高所より降り來れる小鳥の如くに扱はれたり。——乃ち、何となくデリケートなる、弱々しき、野性を帶びたる、奇しき、可愛らしき、活潑なる動物として、——又それと同時に、飛去られざるやう、籠に納むべきものとして取扱はれたり。

自然に法則ありと云へる言説には、吾人は警戒せざるべからず。自然には只必然性はあり。されど誰にも命ずるものなく、服するものなく、また何人も法を犯すものなし。

吾人が基督教理に背反するは、今は趣味の上よりなすにはあらずして、理論の上よりするなり。

佛陀の曰く、『爾の恩惠者に阿る勿れ』と。

何人にもこの箴言を基督教會内にて言はしむる勿れ。——そは忽ちにして並ての基督教の空氣を一新せしむればなり。

今日蠻民が第一に歐羅巴より得るものは何なりや？——歐羅巴の麻醉藥たる火酒（ブランデエ）と基督教なり。而して今日蠻民が尤も速かに頽廢するものは何に仍てなりや？——歐羅巴風の麻醉藥に仍てなり。

人は利他主義者となれば最早おしまひなり。

己の運命に不平を唱ふるは賤むべし。そは正に柔弱の所産なり。譬へば彼が己の悲傷を他に歸するも、また己に歸するも同樣なり。例證を以てこれを示さば、社會主義者は前者にして、基督教徒は後者也。

世に頽廢せる男ほど醜きものはあらじ。

事物の價値は、往々それを得んとする努力の内にあらずして、その爲に費したる物と、その高とに存す。譬へば、世の自由制度の如きは、一度確立せば忽ちその瞬間より自由を失ふに至るべし。――乃ち自由を贏ち得たる曉には、世に自由制度より自由の爲めに不具戴天の敵なきに至るべし。

自由主義とは、これを平易なる英語をもて云はば、人類をして畜類と變態せしむるの意味なり。

自由とは何ぞや?

自由とは自己の責任を明かにすべき意志のことなり。――自由は吾人と他の人間との間隔を保持せり。

何等かの價値ありし國家、また何等かの價値を發揚せんとする國家は、決して自由制度に仍てその領域に達したるものなし。

人々は目前のことにのみ生けり。彼等は全速力に生けり、彼等は全く責任なくして生存し、而して彼等はそれを稱して、所謂『自由』と云へり。

浩然として生くるを得ずば、寧ろ浩然として死するにしかず。

今日までの尤も有力なる雄辯は何なりや？

そは太鼓を叩くことなり。帝王(カイゼル)はこの自由を失はざる限り、彼は常(とこしなへ)に大雄辯家にして、又群集の指揮者たるべし。

思想は我等の感情の陰影也。されど常に感情より瞬昧空虛にして、また簡易なり。

彼は思想家なり——と云ふは、乃ち彼が物を實際より單純化せしめ

得ることの稱なり。

見よ、見よ！

彼は人々より馳り去れり。人々は彼に追從せど、彼は依然として彼等より前に進めり。——彼等は群居を好む輩(やから)なるかな！

父と倅は、母と娘より遙かに互に近親なり。

佛敎は歷史中に發見し得る唯一の眞の積極的なる宗敎なり。

萬人に對する平等の權利、こは將に不正の尤も甚しき形なり。何故

なれば、そを以てすれば高き者は報酬を得ず。

吾人は只單に祈れるものよりも、須く幸福を祝福するものとならざるべからず。

書籍にして他の諸(もろ〳〵)の書籍を超越せる境に吾人を誘致し得ずば、何(いづ)所にかその書籍の價値ぞある？

勝利を得たるものは機會を信ぜず。

總ての深き思想家は、理解せらるる事を誤解せらるるよりも恐る。

誤解は彼の誇を傷くるなるべけれど、理解は彼の心を傷け、彼の惻隱の情を動かすべし。惻隱の情は彼に向ひて言ひて曰く、『嗚呼如何にして爾はまた我が經來たりし如き痛苦を味はんとするや？』と。

我等の行爲は理解せられず。只時に稱賛され、また時に非難を受く。

爾の良心は爾に何を語るや？　曰く、――『爾は爾のごとき者となるべし』と。

大なる生産と、大なる生存の悅樂とを實現せんとする唯一の秘訣は、危害のあひだに生活することなり。爾の市を Vesuvius の丘に建てよ

！　爾の船を未開の海に浮べよ！　而してまた爾は爾の輩と戰ひ、爾自身と戰ふべし！

我等は道德を信ずる以上生存を嫌惡す。

世間には他人に對する同情と干涉との爲に、依卜昆垤兒（ヒポコンデル）となりしものあり。その結果として生れたる憐憫の情は、一種の病症に過ぎず。斯くして世にはまた基督教の依卜昆垤兒（ヒポコンデル）症あり。この病症は、絶えず基督の最後の惱を眼に浮べゐる、隱遁的なる、宗教心を持てる人々を襲へり。

犯罪人に對する吾人の罪は、彼等を惡黨のごとくに遇することなり。

大なる事物に就ては、人は女默を守るか、あるひはまた高踏的に唱へざるべからず。――高踏的と云ふは、卽ち皮肉に、而も無邪氣に唱ふべきことなり。

自己に大なる痛苦を堪え得べき意志と力とを感じ得ずば、何人か偉大をなすを得ん？　惱み得る能力はこれ小事也。この點に於ては、手弱女（たをやめ）も奴隷も、時に巧妙の域に達すべし。然れども、大なる苦痛を蒙り、その苦痛の叫びを聞きて、猶且內なる惱と懷疑との爲に死滅せざるものは正に豪壯也。正に偉大なるものに屬す。

論理より民主的なるもの世になかるべし。論理は人に仍て分ちを立てず。

吾人の腦中に只一滴の血の多きか少きかは、言はうやうもなく吾人の生活を悲慘ならしめ、危からしむ。而して我等此の一滴の血の爲に Prametheus が彼の兀鷹に惱みたるより更に惱まん。されどそれより更に惡しきは、この一滴の血に仍て我等の惱が釀されたる事を知らずして、只『惡鬼』と『罪惡』とに仍てなりと思惟せる一事なり。

徳操一たび眠らば、更に新しくなりて起き來らん。

予は今予の惱に對して『犬』と命名したり。——そは他の犬のごとく尤も忠實に、尤も人なつこく、また尤も無恥にして、また尤も面白く、悧巧げたればなり。——予は他の人々が彼等の犬、彼等の召使、彼等の女房を取扱ふ如く、そを壓迫し、疳癪を喰せをれり。

それ、自らを卑下する者は、自らを高めんとすればなり。——こは路加傳第十八章第十四節の改訂。

多くの人間は無慈悲なるには餘りに他を省るの暇なし。

新約聖書は人間中の全く無智蒙昧なる者の福音なり。その――何物をも超越して――最大の價値ありと見せかけたるものは、事實言つて見れば、今日にても猶忌しきものなり。

人間は何時も千邊一律に道德的なる能はず。

人は道德的になれど、そはその者が必ずしも道德的なるが故にあらず。道德に屈從するは、蓋し卑屈に依るか、虛榮に依るか、利己主義に依るか、退讓に依るか、さなくば熱狂か無思慮に依れるなり。されば施政者の權威に屈するが如きは、正に絕望より出でたる行爲と云はざるを得ず。それ自身の內に少しも道德的なるものなし。

勞働過度、好奇心、同情。――これ近代の缺陷。

十九世紀は概して十六世紀より何等の進步を示しをらず、人類は進步もせず。また存在すらせず。

只慣習なるが故に物を信ずるは、是執りも直さずその者の不正直、怯懦、怠慢を示せるなり。

さて、不正直、怯懦、怠慢は、道德の根本的要素とならざるべからずや？

理智を開發するに、道德は不道德よりも稗益する所多しと思ふはこれ偏見なり。

この鏡の上には（我等の理智はこれ鏡なるが）――正調を示すあるものは過ぎ行けり。一の物は何時も他の物に從ひ行けり。我等是を見てその物を銘名せんとし、是を原因結果と名付けたり。――嗚呼我等は愚なるかな！　我等は恰もこれらの内に何物かを理解し、また理解し得べしと思惟せるなり！　こは我等が只原因結果の姿のみを見たるが故に然く考ふる所以にして、まことにこの表象により、我等は結果よりも更に執實なる關係を發見することを得ざるなり。

良き作者は、啻に彼の智惠を有するのみならず、また彼の友達の智惠をも合せ有せり。

爾は憐憫の道德を以てストイズムのそれよりも高しといふか？　然らばそれを示せ！　されど道德の『高さ』『低さ』の度を計るに、再び道德の杓子定規を用ふること勿れ。何故なれば、世には絶對的の道德なるものはなければなり。爾は他より杓子定規を求め來れよ。而して爾は爾自身に戒心すべし。

乞食は須く禁止すべし。何故ならば、吾人は彼等を救ひたる時も、また救はざる時も、共に憤怒すればなり。

『わたくしが若しも今此處で嘘を申しましたらば、わたくしはもう名譽のない人間で御座います。どなたでも、さうわたくしの面前で仰有つても差支へありません。』

予は現今行はるる裁判所の宣誓及び同所に於る習慣的の神への祈禱に替へて、この樣式を採用せんことを勸む。この方遙かに力强し。

奪き血統には一つの大なる便益あり。そは我等をして貧困を宜く堪へさしむることなり。

彼は古武士中の尤も雄壯なる者の一人なりき。彼は文明の目的が、

名譽、報酬、美人のごとき奪きものをば、卑怯者にまで授けんとする事なるを信じて憤怒せり。

敵中に身を躍らして入るは臆病の驗(しるし)ならん。

冒險的の企圖は、中世及び上代よりも近代に至りて頓(にわか)に稀となれり。その理由は、大方近代人が、前兆、託宣、占星、乃至易斷の如きものに最早信ぜざるに依るならん。乃ち換言せば、吾人は古代人の如く、吾人の爲に殘されたる未來てうものに信を置く能はざるに至りたればなり。古代人は吾人と正反對に、未來に對するよりも、現在に對してはまことに僅少の懷疑を有し居りしなり。

己の身を惱めて、而して女を避けんとする必要のある者は、尤も肉慾的なる男なり。

予は基督教を目して、未だ曾て世に存在せるものの内尤も致命的なる、尤も蠱惑に滿てる虚僞なりとす。――乃ち最大最惡の僞瞞なりとす。予は樣々なる形の下に身を俏せるその思想をば、最後の芽、最終の枝に至るまで識別するを得べし。予はそのことに關しては己を誤れる位地に置くを欲せず、また妥協するを欲せざるなり。――予は諸人に向ひ、基督教に宣戰せんことを激勵す。

罰せられたるものは最早その行爲をなしたるものにあらず。彼は常に身替羊(みがはりひつじ)なり。

(譯者註。身替羊とは、古代猶太に於て罪障消滅の祈禱のため、形式上頭に人民の罪を負ひて荒野に放たれたる山羊のことなり。)

福音書とは、低きもの貧しきものに對し、幸福の路は開かれたりと告示するものなり。――乃ち諸人(もろびと)の爲すべきことは、己を總ての制度、傳習、保護、高級社會より開放せしむることなりと告示するものなり。斯くして終に基督の教理は理想的なる社會主義の教理を出でず。

禁慾主義者は德操の必要を起したり。

財産、所得、母國、位地、階級、法衙、警官、國家、教會、教育、藝術、軍制、これらのものは皆幸福の路の多くの障碍、禍誤、艮、惡魔の詭計なりと福音書は宣せり。——これ軈て又總ての社會主義教理の特長也。

『善とは何なりや？』と爾は問はば、勇敢なる事は善なりと答へん。

主なる國家が基督教を採用するは、全く基督教は服從を教ふる群民の宗教なりといふ考へより出でたるものなり。短簡にこれを云はば、乃ち基督教徒は非基督教徒よりも統治し易ければなり。かるが故に、その性質を暗示して、羅馬法皇は今猶支那の帝王に基督教の傳播を勸

誘せり。

一匹の獸他を見るや、その獸、心の中に自他を相比較せり。未開の民も亦斯かることをなせり。斯くしてその結果は、殆ど總ての人類は、已等を知るに攻守の技量のみとなれり。

嗚呼奇しきものは我等のこの懲罰なるかな！　そは犯罪人を純化せず、又罪障消滅の式ともならず、反つて犯罪そのものよりも汚辱的なるものなり。

吾人が鏡を研めんとせは、その最後に於ては矢張りその鏡が寫すも

のより外に何物をも發見し得ざるなり。また若しも吾人がその寫れる物を把捉せんとせば、その最後に於ては矢張り鏡より外何物にも觸れ得ざるなり。

こは軈て智識の歴史也。

人の良心の惱は、則ち彼の性格が未だ彼の行爲と均等せざることを立證するものなり。世には善行をなしたる後に良心の惱あるが如き場合あり。かかる場合は、彼が未だ一の古き周圍に馴化せず、矛盾せるに依れり。

『道德的』なる觀念の勝利も、矢張り他の勝利と同じく、暴逆、僞言、

讒謗、不正等に仍て贏ち得られたり。

何人も病人に對して忠告をなす場合、先づその忠告が容るると容れられざるとを問はず、己が彼より卓越せるが如き感覺を覺ゆべし。

これ傲岸にして神經質なる病人が、彼等自身の病症よりも、忠告者を嫌忌する所以也。

道德とは、この地上にある他の萬(よろづ)の物と同じく『不道德』なるものなり。——道德それ自身は不道德なるものの一個也。

德操を尤も高き値段にて賣るか、あるひは又教師として、官吏とし

て、時に譬へば藝術家として、そをもて暴利を貪らんか、これ將に天才を凡庸の商人と同樣に下落せしむるものなり。

吾人は吾人の理智に就て、餘りに怜悧ならざるやう留意せざるべからず！

あの女は美しくして怜悧なり。噫されど、若しも彼女にして美しくあらざりしならば、如何に賢くなりしならん。

只徒らに傷け、打勝たんが爲に人は他のものを攻擊するものにはあらず。大方は己の力を知覺せんが爲なり。

多くの人は何か新しき事實を告げられたる時は、焦慮せるが如くに見受けらる。そはその事を先に學びたる者に對して、その新らしき事實が、その者に優越權を與へたるが如くに感じらるればなり。

德操は今日猶尤も贅澤なる惡風なり。贅澤として留めよかし！

決鬪は吾人の爲に殘されたる尤も名譽ある自殺の最後の手段なり。然れども不幸にして、そは迂遠なる方法にして、確固なるものにあらず。

辯證家の與へたる効果ほど手易く拭ひ去らるるものはなし。

己を知る事を避くるは、これ理想家の怜悧なる所なり。理想家とは、乃ち己に關する事を知らずして過し得るほどの思想を有せる動物にして、またこの理（ことはり）さへも知らずして過し得るほど聰明なるものなり。

多く旅せる者も、凡そ世界中にて人間の顔ほど醜き所を見しものはあるまじと思はる。

我輩は人が水中に落ちたる時、あたりに居れる者の内何人も飛込むの勇なき時は、倍增して喜んで水中に飛込むべし。

道德はその奥底に於て科學と背馳せり。

予は何人をも哲學に引入るるを欲せざるなり。哲學者が珍奇なる植物の如くにあるべきことは、尤も必要にして、また望ましきことなり。

社會に於て己の位地の堅固なることを感じ得ざる者は、譬へば揶揄するが如き事をなして、己の親交ある友人より己が卓越せる事を公に示さんとして、あらゆる機會を利用す。

見よ！

一羽の鷲は大なる圓を描きて空を舞へり。而してその上には一匹の

大蛇は懸りをれり。そは食肉鳥等の如くにはあらずして、一個の朋友の如くなり。『これらのものは我が畜類なり。』とツァラツーストラは言へり。『天が下にて尤も傲岸なる畜類にして、また天が下にて尤も叡智なる畜類なり』と。

男の自嘲病を醫する確實なる療法は、賢き女に仍て愛せらるること なり。

歡待の目的とする所は、他人の敵愾心を麻痺せしむるにあり。吾人は他人を目して敵とせざる時は、歡待は忽ち消え失す。歡待は悪しき推測の存する限り連續すべし。

如何なる目論見もその根本となるものは純然たる一六勝負也。然れども、多くの人はこの一六勝負に際會せしこと稀なり。

良き友人となり得るものは、又良き妻を得べし。何故ならば、良好なる結婚生涯は、友誼を結ぶ技量如何んに懸り居ればなり。

世の母は、常に己の息子の友人にして、際立つて成功せるものを羨望す。概して母は己の息子を愛するよりは、己の息子を通して發露する己を愛す。

ある母は、幸(さち)ある、名譽ある子女を要し、またある母は、不幸なるものを要す。——然らざれば彼女等は子女の母として、己の尊きものをば示すことを得ざればなり。

淫猥なる女人の夢に抱かれんよりは、殺人者の手に落つる方勝れるにあらずや！

あの男子(をのこら)等を見よ。彼等はこの地上にて女人と共に寢ぬるよりほか宜きことをば知らざるなり。噫汚穢なるは彼等のたましひの底なるかな。

貞節はあるものには德操なれども、多くのものに執つては殆ど惡德

なり。

女は男と全き友誼を結ぶことを得ん。されどそを保たん爲には、大方多少の生理的の缺陷を要するなるべし。

結婚せる夫婦の者が同棲せざるならば、目出度き結婚は增すならん。

一人が己の主張を持するは、則ち彼自身がその主張を獲得せしを誇りをればなり。また他が己の主張を持するは、則ち彼自身がその主張を理解し得しを誇り居ればなり。——共に虛榮の結果也。

戀のため、女は男がまざ〳〵と想像に浮べたるが如き理想的のものと化す。

男女互に痴話口說の後、男は主として相手を痛めしを想ひて惱めり。女は主とてし充分相手を痛め得ざりしを想ひて惱むを常とせり。かるが故に、女は泪に仍て、獻欵に仍て、將又取亂したる風情に仍て、相手の心を彌增に重からしめんとはする。

嬉しい時の友情、悲しい時の無情、——これ人々の友誼を作る。

學者にして政治家となる者の滑稽的なる役割は、何時も極り居れ

り。——彼等は國政の良心とならざるを得ず。

眞理はそを口にすること頗る危險なる時は、そを口にして猶憚らざるほどの勇士を發見すること稀なり。

只差閊へなき時は然らず。

我子等は近付けり。ツァラツーストラは成熟せり。わが時は來れり。あゝわが晨なり。わが日は始りぬ。

猿は人間に執つて何なりや?——彼は笑草なり、恥づべき代物也。されどそれと同じきは人間が超人と相對せし時ならん。——人間は超

人に執つては笑草なり、恥づべき代物也。爾等は昆蟲より人間に進化せしものなり。然れども爾等の内には未だ多くの昆蟲の素質は存するなり。爾等は曾て猿屬なりしなり。然れども爾等人類は未だ猿よりも更に猿なるなり。

予は爾に働かずして戰はんことを勸む。

予は爾に平和に與せずして打勝たんことを奬む。

爾の事業を戰鬪とせよ。爾の平和を勝利とせよ！

己の理智に從ふよりも、己の道念に從ふ方遙かに便利なり。何故なれば、道念は失敗をなす度毎にそれ自身に遁辭を見出し、それ自身に

意氣を鼓舞すればなり。かるが故に世には道念に從ふもの多くして、理智に從ふもの少きなり。

自殺を考ふることは大なる慰安なり。この方法に依つて、人は眠られぬ夜も安かに過す事を得べし。

吾人には人の生命を剝奪するの權利あり。されど死を剝奪するの權利は有せざるなり。――そをなすは將に殘酷也。

『これは、――今はわたくしの道です。――さて、あなたの道は何方(どちら)です？』と予は斯く『道』を尋ねられたる時答へたり。何故ならば、

定りたる道なるものは、世になければなり！

男兒の幸福は『予が爲さん』といふことなり。
女子の幸福は『彼が爲さん』といふことなり。

骨、肉、内臓、血管が皮膚に包まれて、初めて人間の容姿を見るに堪え得るものとなせり。斯くの如く、感情乃至情緒は虚榮に包まれ居れり。——虚榮はたましひの皮膚也。

戰爭と勇氣とは、憐憫がなしたるよりは遙かに大なる功績を遂げたり。今日まで犧牲者を救ひたるものは、爾の同情にあらずして爾の勇

氣なり。

爾女に近付かんとするか？
爾の鞭を忘るること勿れ！

人間は獸と超人とのあひだに渡されたる繩なり。——地獄へと掛けられたる繩なり。
危き綱渡りなるかな。危き旅なるかな。危き回顧なるかな。危き戰慄と跛行なるかな。

愛に仍て爲されたることは、常に善惡の堺を越す。

人が毒藥を仰がざる尤も確固たる理由は、毒藥が生命に及すが故にあらずして、要するに不味きが故なり。

愛されんと欲するは僭越の尤も過ぎたるものなり。

人は尊敬せざる限り嫌惡をなすものにあらず。乃ち己と均等の者、または上長の者を尊敬せし時これを嫌惡す。

淫蕩の母は悅樂にあらずして無悅樂也。

予が曾て聞きたる內、尤も眞面目なる狂文は下の如きものなり。

『初手は痴愚なりき。痴愚は神と共にありき。また痴愚は神なりき。』

と。

天下には宗教を亡すほどの充分なる宗教なし。

只一人に愛着することは暴逆なり。何故ならば、そを爲すには他の萬のものを犧牲としての爲事なればなり。

神に對する愛また然り！

眞理の進化と人類の幸福とのあひだには、先天的に確立せられたる

調和なるものなし。

藝術は人生の大なる刺戟也。さるを如何にしてそを無目的、無標點なりと目するか？

l'art pour l'art（藝術の爲の藝術）なりと目するか？

滔々たる奔流は多くの石を流し、灌木を押し流せり。大なる精神は又痴愚を流し、凡庸を押し流せり。

予の受取り難き人物は下の如し。——

Seneca は德操の猛者也。

Rausseau は *in imparis naturadibus*, 乃ち自然へ歸れの御本尊。

Schiller は Sackingen の道德の喇叭吹き也。

Dante は奥津城の内にて詩を書ける蠶狗也。

Kant は cant（不可能）にして理解し能はぬ性格なり。

Victor Hugo は痴愚の海に建てられたる燈臺也。

Liszt は女の尻を追ふ競走派也。

George Sand は *ludea uberlas* これを平易なる英語もて言つて見れば、The cow with plenty of beatiful milk（良き牛乳をたんと持つた牝牛）也。

Michelet は襯衣（シャツ）一枚の空元氣。

Carlyle は食もたれの悲觀論。

John Stuart Mill は一本氣。

Goncourt 兄弟は Homer と戰ひし二人の Ajaxes の如し。

Offenbach の音樂は Zola の如く惡臭を好めり。

❧

讀者が不平を唱ふる作者の謎語なるものは、往々作者の著書の內にあらずして、反つて讀書の腦中に存することあり。

❧

近代の悲觀論は、只現今の世界を無用なりと云ふに過ぎず。斯くあるべしといふ世界、又は生存に就てにはあらず。

❧

予は予が思想と言語との周圍に垣を作らん。然らずんば、豕(ゐのこ)、放肆

の徒の類(たぐひ)は、予が園に侵入すべければなり。

❧

世間向の書は常に惡臭を放てる書籍なり。それらの書籍には下賤なる民衆の臭ひ附着しをれり。されば苟も民衆が飲食をなし、あるひは又祈禱をなす所は、あたりの空氣腐敗せざる處なし。人は淸淨なる空氣を呼吸せんと欲さば、斷じて會堂に立入るべからず。

❧

善良の齒牙と善良の消化とを予は君に望む。——まことに君はそを要すべし！　而して若しも君が我が書に堪へ得るならば、君は好機嫌をもて予をも怵へ給ふらん。

❧

世には親切の倨傲なるものにして、一見邪悪の如き外見を有するものあり。

爾はあるものに長く從はざるべからず。然らずんば、爾は悲哀に落ち、自尊をも失ふに至るべし。

こは自然の道義的の命令の如く予には思考さる。

世間にて云ふ所謂『良心』なるやつは、圓滿なる消化に依つて生れたる生理的の一情態に過ぎず。

無い袖は振れず。——これは個人に就ても眞、國家に就ても眞。

雅典の人々は本能的の人物なりき、多くの尊き人物の如くに。

吾人は憐憫を顯す必要はあれど、それに引入れられざるやう深く留意せざるべからず。何故ならば、不幸なる者共は愚鈍なれば、憐憫の示現を見て、地上に於ける最善のものと思惟すべければなり。

與へたる約束を守らん爲には、人はよき記憶力が肝要なり。また憐憫を感じ得る爲には、人は多大の想像力が必要なるなり。されば道德は餘程善良なる智力に待つこと大なり。

予は萬(よろづ)の人々に向ひ、總ての事物を弱化し、疲憊せしむるものに對して『否』と言はんことを教ふ。また予は萬の人々に向ひ、諸(もろ〳〵)の事物に力を與へ、その力を保持し、力の感覺を整明するものに對し、『然り』と言はんことを教ふ。

◆

嫉妬と友情、自嘲と自負とのあひだには、實に大なる相違と間隔あり。――希臘(グレシア)の民は前者に生き、基督教徒は後者に生きぬ。

◆

教理が緩みたる時、藝術は首を擡ぐ。

◆

人類は獸類と相比較せる時、決して進化の手本とならず。文明の生

みたる龍兒も、アラビアの民、コルシカの民と相比較せしときは、畸形兒たるを免れざるなり。されど、支那人のみは多少成功的なる部類なり。――と云ふは、乃ち彼等が歐羅巴人よりは、持久力に於て勝りをればなり。

◆

音樂はあらゆる教養の最後の氣息(いき)也。

◆

詩人は彼の思想をお祭の如く韻律の車に乘せて運べり。彼は常に步行することを得ざればなり。

◆

我等の時代の大なる戰鬪は歷史研究の結果なり。

總ての理想は危險なり。何故なれば、理想は現實の事物を卑め、それを汚辱すればなり。理想は全々有毒なり。されど時に又良藥として缺くべからざるものなり。

誰一人として、我等歐羅巴人が未だ野蠻なる想念の内に生存しゐるを充分に覺知するものなし。則ち『靈魂の救濟』は只一册の書に懸れりと信じをられしなり！　而も今猶信じられをれりと予は聞けり。

書物を書かず、多く思索し、而して不滿足なる社會に生活する人は常に良き著述家たらん。

爾は須く一日の内に十度笑ひ、愉快となることを勉めざるべからず。然らざれば、悲哀の父なる爾の胃の腑は、夜間に至りて爾を苦しむべし。

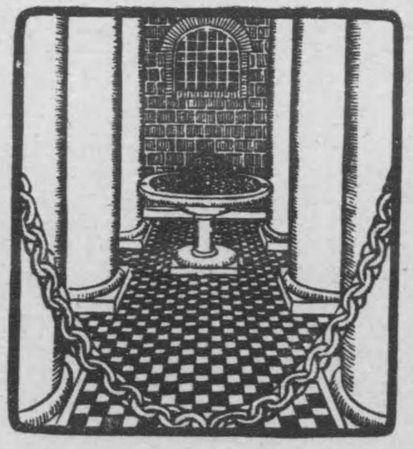
何故に我等の良心は、普通の社會的の會合のありし後、我等の心を痛ましむるぞや？　そは我等が眞面目なる問題を輕々しく取扱ひたればなり。人物を評する場合肯綮に當りたる事を言はざりしなればなり。言ふべき時に沈默を守り居りたればなり。また時として、我等は躍り上りて逃げ出さざりしなればなり。これを短簡に言はば、乃ち吾人は社會に於て、恰も吾人が社會に屬する一員の如く振舞ひたればなり。

凡そありとある慰安の内、慰安を求むる者に向ひ、君の場合には最早慰安を與ふるの道なしといふほど効力あるものはあらじ。こは別格を暗示するものなれば、悲愁に沈める者も、忽ちにして又頭を擡ぐべし。

予が幸福の形式。――『然り』か『否』かにして直線也。決勝標なり……

ンセプイとクッリンヘ

集　言　箴



ヘンリック・イブセン

ヘンリツク・イプセン小傳

ヘンリツク・ヨハン・イプセンは千八百二十八年三月二十日、諸威の Skien といふ町に Knud Ibsen を父とし、Maria Comelia Altenburg を母として生れた。イプセンの家は代々船長を業として來たが、父の代となつてからは商人となつた。イプセンの幼い頃、父 Knud はふとした事から商業上の手違ひをし、爾來彼は八歳の時から數年間は具に人生の辛酸を嘗めた。彼は十三四歳まで Hansen といふ人の私塾に學んだ。が十六歳の時家を離れて、諸威の最南の小都會 Grimstad に赴き、此所でとある藥劑師の徒弟となつた。彼はこの徒弟の生活を送ること六年、このあひだ職務の餘暇に大に刻苦勉勵して學問を修業したが、千八百五十年年廿一歳の時、"Catelina" と題する沒韻律語の三幕物を作し、匿名を以て出版した。けれども誰も彼を顧るものはなかつた。彼は多くの文人がその無名時代に經驗するやうに、その頭初に於ては甚だ悲慘な運命を見た

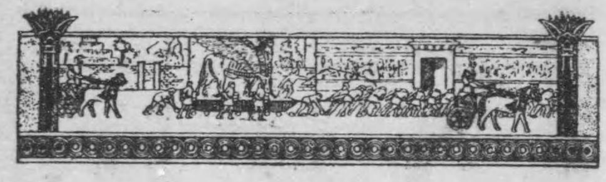
のである。併し彼はそれにも折せず、同年首都 Christiania に出で、此所で二幕物『勇士の墓』を公にした。が不思議とそれが興業師の眼に留り、クリスチヤニア劇場に上演されることになつた。この上演は非常な成功であつた。この時からイプセンの生涯の曙光が見え出したのである。同年の秋、Bergen の市にベルゲン劇場が新に設立されたが、彼は『勇士の墓』で異常なる才能を發揮した爲め、一躍この劇場の舞臺監督に上げられた。彼はこの劇場に在職中毎年三ヶ月づゝは演劇視察の爲め獨逸に派遣され、獨逸の各都に滞在した。この間『聖ジョンの夕』、『ソルハウグの饗宴』等を作した。前者は失敗の作であつたが、後者は非常な成功を拍し、諸威瑞典を通じ、殆どあらゆる劇場に於て演ぜられた。が千八百五十七年イプセンはベルゲンの劇場をば友人ビヨルンソンに讓り、首都 Christiania に歸つて其所の諸威座の主事となつた。併しながら、イプセンはこの劇場を主裁すること僅か五年にして、終に劇場は破産するに至つた。

この諸威座に止るあひだ、彼は『ヘリゴランドの海豪』(一八五八年)、『戀の喜劇』、(一八六二年)、『偕望者』(一八六四年)を書いた。

彼は千八百六十四年の四月、故國に不滿を抱き、飄然として Christiania を去つた。爾來二十七年の長いあひだ、彼は伊太利獨逸等に放浪の生活を送つた。彼の所謂社會劇、思想劇なるものは、實にこの放浪の生活の間に出でたものである。

併し千八百九十一年——國を以でゝ二十七年目——彼は初めて故國 Christiania に居を定めた。彼は放浪中千八百六十六年に國庫から年金を受くる身となつたが、漸次著書などの印税も増して、その居所を Christiania に定めて以來は、永く貧苦に惱んだ彼も、豐かな生活を營み得るやうになつた。

彼は千九百六年五月二十三日、故國の首府に多數の民衆の崇敬と愛慕とを一身にあつめて、溘焉として逝いた。享年將に七十有八歳であつた。



如何なる詩人も、已の生涯を已の爲にのみ送るものにあらず。彼の同胞は、眞に彼と喜怒哀樂を共にせるなり。若しも斯くの如くにあらずんば、何所にか兩者の相融和すべき橋梁ぞある？

我等若しも自ら考ふることを許さば、この世には我等並ての者をして氣を狂はしむるもの一あり。そは『ありしならん』と云ふ思想なり。

美學――かの獨立の存在を要求せる孤獨の美學は、宗教に對する神學のごとく、予には詩に執つて大なる呪ふべきものに思はる。

予が自由に就て唯一つ愛好するものは、そを獲んとする努力なり。予はそを領有することに就ては別に顧慮せず。

藝術品をしてその作者の精神的の所有物たらしむる所以は、乃ち作者がその作品の上に自己の個性の影を留めたればなり。

雲間より朧氣に望みたる時は、眞理も一塊の拔殼のごとく見ゆべし。

人はその友の稱贊に對しては感謝する能はず。但しその同情ある理解には感謝するを得べし。――そは人をして、言はうやうなく喜悅を感ぜしむるものなり。

爾若し普通人より『生活虚僞』(ライフ・ライ)を奪はんか、爾は彼より幸福も共に奪ふが如き結果となるべし。

羅馬を描くことは困難なり。人はそを描き得べし。されど、尤も優秀なる、この市に取つて唯一無二のものに至りては、人は全く傳ふることを得ざるべし。

予はかなしみの才能を受けたり。さればにや詩人とはなりしなり。

通例人の生涯には、正に美なるもの存せり。唯そを覩、そを鑑識し得るものは獨り藝術家のみ。

政黨は恰も坊間行はれる肉引器械のごとし。そはあらゆる頭を一緒に挽潰せり。されば、吾人は馬鹿や阿房が、山の如くにごつちやに堆積せらるゝを目睹すべし。

兄弟姉妹の愛のみは、變化律に從はざるものと知るべし。

如何なる詩人と雖、一物を描くに、大か小か、少くとも一瞬にてもそを己が經驗せざれば、描くこと能はず。

總ての因襲を打破するに、凡そ男女關係に於ける程至難なるはなし。

精神開放の事業に大なる力を傾注せんには、人は先づ多少經濟的に獨立し得べき地位にあらざるべからず。

世に自己の詞と行爲、自己の意志と事業、自己の生涯と主義とのあひだに、時に矛盾の蟠れるを思はざる者ありや?

、虚僞、讒謗、その他のものに對しては、尊嚴こそ唯一の武器なり。

爾は敵の言ひたることが、爾を動したりと他人に悟らるること勿れ。

――單簡に云はは、爾は飽くまで天下に敵なきがごとくに振舞ふべし。

思想界に國境無し。

人は何物よりも先づ外部の影響に對し、如何にして自己を守るべきかを知る必要あり。

沈默は獨斷的の主張の如く、時に大なる虚僞なることあり。

黨派なるものは、他の總てのものよりも、文人に取つては不適なるものに覺ゆ。何となれば、文人は各自に自己の奇嬌なる路を辿らざるべからざればなり。あゝ己の生涯の事業を全ふせんと欲さば、自己の思ひのままなる奇嬌の路を辿れかし。

失墜せしもの再び立たんには、他人の力に仍て再び立つことは能はざるなり。彼は彼の現在により、彼の未來によつて、初めて自己の過去を償ひ得べし。

聖書は決して許されざる、神秘的なる罪惡に就て語れり。――この

大なる、許されざる罪惡とは、卽ち人間の『戀愛生涯』の殺戮を意味せるものなり。

國は滅すを得べし。されど民族は滅すべからず。かの猶太人を見よ。彼等は曾ては一國一民族たりしにはあらずや！　あゝ猶太國は滅べども、民族は今猶絕えず。

詭辯は多數のものを惑す。

喜を別たんものもなし。されど喜は分與を要求すること頻りなり。

爾は同じ信仰を有し居らざることを他人に知らしむる勿れ。爾は恰も爾がそを所有せるが如くに語れ。予は持てりと、聲高に、力强く宣言せよ。然せば諸人（もろびと）は爾を信ずるに至るべし。

總ての文明諸國の經驗が明かに立證するが如く、演劇はその培（つちか）はれたるあらゆる時代を通じ、常に他の藝術より擢でて、國民教育の根本的創造者たることを示し居れり。この事實の尤も顯著なる理由は、演劇が現實世界に親密なる直接關係を有することに因せり。卽ち、演劇は他のものより會得し易く、萬人向なるに依れるなり。

一婦人の助言は萬人を益す。

世界を幷呑せんとする獨逸魂の氣息こそ、卽ち世界の未來の帝國を前兆するものなり。

スカンデナビア人の四海同胞主義が、生氣潑剌として發露せし一路ありとせば、そは彼等相互が祝祭を行ふことを、何時にても逃さざる用意のことなるべし。

ある種の性格は、時々烈しき爭鬪を必要とせり。

予は最早民衆の言ふ所、書籍の藏する物に滿足する能はず。予は身

自ら事物を思索せざるべからず、而して事物を明瞭ならしむるに努めざるべからず。

歌劇（オペラ）は戲曲（ドラマ）が要するが如き高き教養を有する觀客を要せず。

人生は往々人間のたましひを困憊せしめ、人間の才能と意志とを疲弊せしめて虛無らしむ。こは正に下らなき周圍の呪ふべき所以にして、周圍こそ吾人のたましひを小ならしむるなり。

權威を得んとするの秘訣は、爾の成就し得る以上の事を企てざることなり。行動と勝利との大なる奧儀は、卽ち理想を持たずして爾の生

古代の藝術は、幻影と、就中私人的、個人的の表白に缺けたり。

モデルは彫刻家又は畫家に必要なるが如く、喜劇の作者にも亦肝要なり。

君も僕も、何時神鳴が頭上に落つるやを知らざるにはあらずや？

さるを今日の天道の光を樂まざる馬鹿ありや？

理解はあらゆる人事關係の第一義也。

世間擧つて、爾沈倫して再び立ち得ざれかしと、聲を和して予を呪

活を營み得る事なり。これは全く、浮世の智惠の總勘定也。

朝令暮改は宜しからず。爾は如何にあるとも、常に全人自覺的ならざるべからず。刺激と衝動とに仍て動くべからず。

最終の危機と必要とに臨みたる時は、我等醫師は如何樣なる手段をも敢てす。

噫予は一個以上のたましひを持つか、——然らざれば皆無なるを希ふ。

へる時、予には殆どその聲を信ぜんとするが如き瞬間來れり。されど予が内なる自信は、忽ち又揚々として首を擡げ、予を蘇生せしめたり。

日光の下にて生れたる詩なし。そは日光の下にて記すことを得べけれど、そを案じたるは夜の沈默の内にてなり。

東略密計は小心の輩、愚劣なる周圍の賤分にして、又その一部なり。

自然的に、予は美の法則に從へり。されど予はその舊套に對しては、何等の尊敬をも有せず。

淋しき婦人が身を守るは、中々に手易き事にはあらず。

己を確立するの勇ある者には、幸運は常に助勢せるが如くに思はる。

人は眞に己の生涯の事業に自己を傾注せし時は、最早己の『朋友等』を保持するを望むこと能はず。

不幸にして、我等男子等は、堅からざるべからざる時に、常にその主張堅からず。

Michael Angelo！——予の意見にては、凡そ彼ほど美の因襲に對し

て罪を犯せし者なし。されど彼が創作せしものは、一として美ならざるはなし。そは蓋し性格躍如としてありければなり。

生活を營むと云ふは、己一個人として、全人的に、單獨に、時流を滑り下ることを稱せるなり。

予は信ず、何時の日か、必ず總ての詩、哲學、宗教は、ある新しき物と變り、我等今日の人間が到低明確なる意識を有し得ざる、ある新しき活力と變換すべし。

友達は厄介なる贅澤品也。人一度彼の職業又は使命に全精力を注が

んか、彼は終にそを保つことを得ざるに至るべし。友達の厄介なる所以は、その者の爲に彼が骨折をなすが故にはあらずして、反つてその者に對する遠慮より、己の行爲を制肘せざるべからざる點にあり。

己の損失を看過してこそ、人は常に利益を收め得べし。

爾の正義を緩慢と沒人道とに染ましむること勿れ。

國家あるひは政府は、未だ自由藝術、科學、文學の外飾のみを見て、そが國家の柱石たり、梁材たることを氣付かず。

作家は己が觀察せしものと、己が經驗せしものとを、確然と區別せざるべからず。何故なれば、後者のみ獨り彼の創作の骨子として使用し得べければなり。

大なる記憶の内には、生長の種子横れり。

空中樓閣はこの世の中にて尤も美しきものなり。——そは避難するに手易く、また築くに難からず。

人間の理想の不朽なるを信ぜざるが故に、予はその點に於ては悲觀論者也。されど予は理想の增殖と開發とに對する吾人の力量を確信す

るが故に、その點に於ては樂觀論者也。

自己に對する最大の罪惡は、他人に向つて不正に振舞ふことなり。

刑罰は罪惡と共に歩む。

作家の生涯には、天賦の才より以上に、更に別種のあるものを要せり。作家は仍て以て創造すべきある特種の人生の經驗を有せざるべからず。若しも一の作家にしてそを有せざれば、彼は唯徒らに書を作せるのみ。

怠惰は悪魔の枕なり。

運命の蛛網の百千の綾は、げに奇しく、不可思議に入亂れたり。また惡德は惡德の果と混交し、相互に染合へり。されば志あるものにして、そを研めんとするものは、正義と隱れもなき罪惡とが、一に合體せるを目睹することあるべし！

詩人とは何ぞや。——諸人は則ち悉く詩人なるなり。教師も、演說家も、僧侶も、貴きも、貧しきも、苟も己の業務を通して理想を仰ぎ見るもの、是悉く詩人なるなり。

諸國に世帶を張れる者は、その心の奥底にては、よしや身を己の生國に置くとも、家無きがごとくに感ずべし。

我生涯の事業が、今日の時代精神を明日のものと會すべく、その用意に何等かの貢獻をなし得なば、それにて予は滿足を表すべし。

予は敢て毀譽褒貶を希はず。唯理解を要求するのみ。

詩人の主なる義務は省察するにあり。回顧するにあらず。

結婚は要求申請などに滿ちて、戀愛とは何等關聯する所なし。

『生きる』といふことは、一の技術也。

予は友情が仍て以て繫るべきが如き協和を欲せず。

性格の高尚なると、意志と、心とは、吾人を唯自由になすべし。

爾は女なり。されば爾は爾の心の要求が、この地上にて唯一の大切なるものの如くに思惟せり。されど予は男兒なり。一人の女は何時(いつ)にても他の者に替ふることを得べし。

大なる犯罪の内には、あゝ何たる蠱惑的の魅力存するぞや！

智の極りたるものは愚、臆病の增長せるは酷、眞理の誇大に取扱はれたるは、蓋し智識の退歩せるものと見るべし。

予は信ず、近き未來に、必ず現今の政治的乃至社會的の思想は地を拂ふに至るべしと。

無智なる者は、馴れざる事物に自己を適應することを知らず。

予は思へらく、我國語に飜譯せられたる Byron の作品は、我美學

の道義的因襲を一掃するに好個の利器なるべしと。そは正に大なる利益なり。

學者は根本的に、詩人とその使命を同うせり。彼は先づ己の時代の世事及び道徳の諸問題を、自他に對して明かにせざるべからず。

世には二種の精神的の法則あり、また二樣の確然たる道念あり。――一は則ち男性的のものにして、他は女性的のものなり。この兩者は互に理解し合はざるなり。されど實際に當りては、女子は恰も彼女が男兒にして、決して女子にあらざるがごとく、男性の法則をもて判斷せらるるが常なり。

若しも教會が毎日開かるるならば、日曜の必要は無きに至るべし！

爾は作家としてあらゆる要素を具有せり。爾は暖かき、同情ある感情を持ち、人と場合とに對する觀察眼と經驗とを有し、溢るるばかりの才智を備へ、而して現實を内なる、高き眞理の世界に撞ぐべき理想の幻影を把持せり。――この遷移にこそ詩の眞(まこと)の種子は横はれるなり。

人生は予に好辭令を信ぜざるべきことを教へたり。

犧牲の煙は常に昇ることなし。

若しも予の作品が何等かの重きをなしたりとせば、そは予が現代に屬しをればなり。創作をなす者と、そを受入るる者とのあひだに、決して間隙あるべからず。――彼等相互のあひだには親交なかるべからざるなり。

予は孤然として獨り思ひに耽れる時のみ、正に眞の自己なるを知れり。

我と共に人生根本の信條より思索する者にあらずんば、予の知己ならず。

人生の大なる行爲に對する熱烈なる憧憬と、非常なる精神力を有せし時、その者の取れる手段偏狹なれば、まことに呪ふべきなり。何となれば、かかる手段は精神の躍動を束縛すべければなり。

征服し難き意志の所有者には、天下何物も不可能なるものなし。

予は殆ど我等總てのものが幽靈なることを信ぜり！　我等が父母より繼承せしものが吾人の心を惱しむるのみならず、萬の古き、死せる思想、諸の古き、逝ける信念は吾人を惱せり。其等のものには生命は宿らざれども、吾人に固着し、吾人は其等のものを振放つこと能は

ず。――斯くして、吾人は哀れなるほど暗黑を恐怖せり。

人はその忠實なる友には如何なる物をも贈り得べし。――されど、如何なる物とは云へど、己の愛する女のみは贈ること能はざるなり。若しも彼にしてそを與へんか、彼は己のたましひの秘めたる蛛網を破り、二個の生涯は破滅を見ん。

周圍は想像が創生せらるべき形體の上に大なる影響を與ふ。

我等は往々飜譯文を誤解せり。何故なれば、不幸にして飜譯家それ自身は、餘りに何時もながら眞の理解に缺けをればなり。

自由主義者は自由の不具載天の仇敵也。思想と精神との自由は、尤も宜く專制政治の下に蔓れり。この事實は、最初佛蘭西に於て、その後獨逸に於て、今は露西亞に於て示顯されたり。

總ての者は、不可避の事物に對しては屈從するか、あるひは馴化せり。

人間は、精神的には一個の遠視眼動物なり。彼は遠くに在る時尤も明かに事物を省察し得べし。鎖末なることは彼をして錯雜せしむ。されば、彼は事物を判斷せんには、先づその事物より離れざるべからる

なり。人は夏を描くに、冬の日に於て爲すを尤も得意とせり。

愚弄するは易し。されどそを其ゆる方美し。

予はその用途なくして、才能の存する所以を理解すること能はず。

悪しき精神は世を支配せり。されどその悪しき精神も、我等の胸中にその援助者を見出さずんば、彼等の力は些少のものならん。

爾若し鰐を檻に入れなば、鰐は門を抉ぐべし。鰐を入るる門は、須く黄金か鐵を以てすべし。

偉人とは、己一人にて、己の職務に信實、正直なることなり。こはあれやこれやをなさんとすることを意味するにはあらずして、彼のなさざるべからざることをなさんとすることを意味せるなり。己は己なればなり。

廣濶にして自由なる沃野彼を待つ時、何人か狹穴に潜む者ぞある？また宜く耕作されたる田圃を見出し得る時、何人か未開の土地を耕す者ぞある？

ある種の書籍は、昨日と今日とのあひだに大なる溝渠を作れり。

眞の力ある精神生活には、心のいみじう暖かなるものを、その第一の必須なるものとせり。

日常生活といふは、則ち何等の大なる感激もなく、深き感情もなく、孤獨なる思想をも持たざることを云ふなり！

國家は個人の呪詛する所なり。

詩とは何ぞや？　そは一の空中城閣にして、人の胸の中に、たましひに仍て築かれたるものなり。

人間は變つた動物なり。彼等は何時も何か己を樂ましむるものを要せり。

諸(もろ〳〵)の道並てよろし。若しもその道程にして、同一の決勝標に達せしむるならば。

國家を自由と獨立とに導くは詩人の義務なりと云ふ説には、予は賛同し難し。詩人の義務は、寧ろ個人を自由と獨立とに導くにあり。

思ふに、飜譯者にして原著者と同種族に屬する者なりせば、詩の飜

譯は、恰も作者自身が書きたらんやうなる文體にてなさるべきが至當ならん。

人相互に多くを言はんと欲する時は、長文の書簡は書き難し。

小唄は一個人が書き得るものにあらず。そは全國民の詩才の總勘定にして、その民衆の詩才の果實なり。

全國民こそ、大なる智識的の運動に參與し得べけれ。

約束は何人も拘束するごとなし。男も女も。

道德の概念も、藝術の規矩も、共に決して永遠のものにあらず。

南方人の美學上の原則は、全然吾人のものと異りて、絶對美を要求せり。それに反して、我等北方人には、あらゆる醜もその因襲的の眞理の餘德に依りて美となれり。

人の精神の革命は尤も必要なり。

人は自由と眞理との爲に戰ひに出づる時は、決して己の最上の衣服を着すべからず。

X氏の眼には、唯二種の人間しか存せざるなり。則ち自己に對して有益なる者と、自己を羈束する者との二種なり。

千言は一の實行にしかず。

戯曲は吾人の知れる如く、抒情詩と史詩とを繫ぐ鏈環なり。かの古史時代は、戯曲的の手法によりて現實界と親交を結ぶに至れり。されどかかることは、恰も銅像に皮膚、毛髪、眼眸のさながらなる色を與ふるも何等役なきが如く、決して爲すべきことにはあらざるなり。

自由は、蟭蟟を蝶々になすことなるを記憶せよ！

一個の詩人として予が作せし總てのものは、悉く予が生涯中のある場合、またはある感情にその根元を有せざるものなし。予は人が言ふが如く、唯良き材料が手に入りたりとて創作せしこと絶えて無し。

爾の翼の力に信ぜよ！

何時の日か、最大の捷利なるものは、實はその敗北の内にあることを明かに見得るに至るべし。

政治家及びその他の如何なる者も、成就せしむべき一定の大なる事業を有する者は、嵐の爲に己の路より驅逐せらるるが如き事なきやう臍を堅めざるべからず。——若しも彼にして、彼の詞の如く強からんには、如何なる嵐も彼を一分だに微動せしむることを得ざるべし。

詩人に執つて有難きものは、盲目的に崇拜せらるることにあらずして、理解せらるることなり。

人間は幸福に近付かんには、幾多の梏桎をば破るべし。

英雄の墳墓として尤も高雅なるものは、蓋し詩人の頌歌に仍て建て

られたるものならん。

女人は地球上の最大の力なり。男をば神が導き給ふやうなる所に埒し行くは、一に彼女が掌中にあり。

一學藝の完全なる修得より外に、人間の成熟を助くるもの他にあらじ。

花の摘まれたるは、蓋し凋みたるに同じ。

予には孤立することが避くべからざる必要となりたり。

否、總ての政治的、商業的、乃至社會的の特權を有する我國民中の少數者は、斷じて自ら進んでその特權を放棄し、あるひはその特權を無特權の多數者に分與するが如きことはなかるべし。かかるものはその所有者に仍て放棄さるべき性質のものにはあらずして、そは正に戰鬪をもて贏ち得ざるべからざるものなり。

一の作家成功を收めんには、先づ傍觀者の制肘を逃れざるべからず。

一度行爲が成就されなば、そを稱ゆべし。

予は古き以前に、世界的の標準なるものを打立つることを止めたり。その惡しきことを認識したればなり。

解放の事業の行はるるは、獨り政治界のみなりや？　たましひの解放は最初になすべきものにして、また必須のものにはあらざるか？

この世の中にて、自由なる人間が只一つ出來得ざるものあり。――そは鄙陋の徒となることなり。

民衆は常に不承不承に、十日の菊となりし頃に、己の怠慢の彌縫を始むるかと思へば、實にその思ひの内には、何となく重苦しく、全く

心を痛ましむるものあり。

爾は何等の權力を有せざる時、正義なりとて何所が善きや？

詩人は、理想、主義、規矩を嫌忌することは得べけれど、個人を厭ふことは能はず。

心の宿れる所に家庭あり。

予は『良き市民』、あるひは正教徒となるべき何等の才能を有せず。また予は、自己が才能なしと感ずるものに、敢てなりたしとも思はざ

るなり。

理想は生長し、然る後遲々として傳播し行くなり。

血族は自己の血族の行爲を分たざるべからず。

予は各國の農夫を知れり。されど何所に往くも、予は未だ一度も寛裕の心を有し、獻身的にして、私利を顧みざるが如き者を目擊したることなし。否、それ所にあらず。予が至る所にて目擊したる彼等は、實に私利私慾の徒以上なりき。

噫この眠たき、無感覺なる滿足！　予はこの滿足なるものが、まことに忌しきものを含有せるが如くに思はる。

序詞（プロローグ）とか、結詞（エピローグ）とか、總てこの種のものは、理窟なしに舞臺より放逐すべきものなり。舞臺は演劇藝術の生家にして、この種の宣言は演劇藝術にあらず。

『相分つ！』といふは、則ち結婚の本旨なり。一人が勵み、戰ひ、保護すれば、他はその痛手を癒するなり。――斯くしてこそ初めて彼等兩人は一體なりと云ひ得べきなり。

幸福は大膽なる行爲をなすの値打充分あり。

その所有者に執つて、明晳なる頭腦より更に大なる價値あるものあり。――そは全精神なり。

一個の "Pastor Manders" は、常に何所かの "Mrs Alving" をして不穩を起さしむるやう教唆すべし。彼女は女なる以上、一度始めなばその窮極までも至るべし。

政治に關與し、政黨に加はる事には、德性を汚さしむるものあり。

愛國主義は刹那的の感情に過ぎず。

『生れながらの自山なる人間！』――こは詞の上の手品に過ぎず！

世にはかかるものは斷じて存在せざるなり！　結婚、卽ち男女兩性間の關係は、人間を頽廢せしめ、諸人（もろびと）に奴隷の印章を帶ばしめたり。

良き思想を殺すは大なる罪惡なり。

正義を持するは、必しも勝利の保證にあらず。

予は燈の下にて、たまたま戲曲を耽讀することを好めり。予は戲曲

上の事物に對し、力强き想像力と理解とを有しをれば、萬（よろづ）のもの悉く予には恰もさながらの自然の如く、眞實の如く、また生けるが如くに映じ來るなり。斯くて予に執つては、戲曲を讀むことは、殆どその上演を見るに異らざるなり。

根强き松には、只一夜の嵐にて、その枝の悉くを失ふことは辛し。

民衆が劇場を建つるより會堂を設くる方重要なりと思惟する以上、また美術博物館より Zulu の傳道會を援助せんとする以上、藝術はその必要なる所以を認識せらるるは愚か、中々に繁榮を見るなどは覺束なきことなり。

自由となることは至大至要のことなり。

一人を愛せざりし者は人類を愛することを能ず。

爾の望みを全ふし、爾の力を用ひよ。この大なる權利は諸人(もろびと)これを有せり。

無借！　無貸！

家庭の生活は、その基礎を貸借に置きたる時は、最早自由も美も失ふに至るべし。

一の新戯曲は、その藝術品としての功績を主として評價され、理解せらるること絶えて無し。評價は戯曲と演伎との兩者の上に下され、兩者は一體となるが常なり。この二個の全く別種のものは互に混同され、又何(いつ)時も極つて公衆の主なる興味は、戯曲そのものよりも、寧ろ演伎、演出法、俳優等に掛れり。

人生には、人の希望や欲求をば遮るもの實に數多し。

予は往々眞理は全く美の仇敵にはあらずやと危惧せり。

言論の自由は、予が尊重する唯一の民權なり。

多くの人は、死に瀕したる時、彼等の悲哀に仍て高めらる。

民衆は決して正しかりしことなし。決してなしと予は斷言すべし。民衆は正しといふはこれ社會の僞の一にして、之に對しては、自由なる、思想的なる人物は戰はざるべからざるなり。そも一國に於て民衆を形るものは何者ぞや？　彼等は果して賢なるか、將又愚なるか？

大概の場合、詩を飜譯するに、全く、間然する所なく、その原詞の内なる深さを傳ふることは難し。

未來と尤も密接に相接觸しる者は正し。

天は愚かなる者に對し殊に惠深し。

道德は記述せられたる事物の問題にあらず。一個人により、時代により、各自に異れるものなり。

理智の健かに開發したる人士に執つては、『祖國』てう昔風なる思想は、全然不滿足なるものなり。彼は最早彼の屬する政治的なる公共社會には滿足する能はざるなり。予は信ずるに、國民的自覺なるものは

逝きて、更に種族的自覺なるものに依つて替へらるべし。何は兎もあれ、予自身は概にこの醇化を終りたるなり。予は予自身を諾威人なりと感ずるに始まり、更にスカンヂナヴァ人に進化し、今やチユートン主義に達するに至れり。

さま〳〵なる道に於て、基督教は男女を退化せしめ、羈束を加ふ。

世には智識を教ふるの師許多あり。されど智識なるものは何所にありや？

美とは何所にありや？

こは慣例の一に過ぎず。時と所とによりて流用せらるるやう造られたる貨幣の如し。

ちつぽけなる人間共は、てんでんに、恰も世界の自由と諸の人類の救濟は、一に彼の孱弱なる双肩に仍て生るるかの如く、自己の生涯に多大の價値を置けり。

幸福はそを獲得するの勇ある者を、絶えず助くるが如し。

足下は爲事を愛することを夙に學ばれたり。予には、そが幸福を與ふる所以を理解するには、更に手間取るべし。されど予にして一度そ

を學ばんか、予はたましひを籠めてそを熱愛することを學ぶべし。

人生は無慈悲なり。人生は生者も死者も顧ることなくして、その道を進み行くべし。

詩人となるといふことは、己の自我の絶對的なる主となるの意なり。

如何なる者も、この地上のある場所に於ては、到底他に讓渡し難き權利を有するものなり。彼はその處に於て全く自己を確立し得べし。

己が交際を求めんとする人物に對しては、人は嘲笑せず。

學者輩が動物類を苦しむるは、眞に怪しからぬことなり。彼等は、雜誌屋や政治家の上にこそ實驗を試むべし。

エルラよ。

人間とはあのやうなるものなり。彼等は同時に愛したり疑つたりするなり。

時代精神と調和せざるものは滅すべし。

古き交遊は鏽を生ぜず。

嘘と玄妙なる挨拶とのあひだには相違あり。

然り。予は多くの者を嫌忌せり。この國に於て、群集より頭を擡げる總ての者を厭へり。予が彼等を嫌忌するは、彼等を愛し得ざればなり。

今の世は、人甚しく癈頽したれば、精神錯亂も往々智識の如く見做さるることあり。

現今の社會は人類の共和生活にはあらずして、只單に人間共の合併

に過ぎず。

あゝ偉人が常に朋友を有し得ざるは何たる悲劇ぞや！

理想の要求なるものをもて、我等貧しきものを責むる督促者より逃れ得なば、あゝ如何に人生は渡り易からん。

予は一人の詩人が、大戯曲と大小説とを二つながら創造するは難かるべしと信ず。——巨擘たらんには、己を制限せざるべからず。

己の一生の事業を放棄すべく餘儀なくせらるるは、人間のたましひ

に執つては最も苦痛なる拋棄なり。

◆

爾若し爾自身を疑ふならば、そは震動する地上に立ちたればなり。

◆

今日の文明に於ては、女子は己を確立し得ざるなり。今日の文明は、全く男性的の文明なり。則ち法律は男兒に仍て組成され、諸の女子の行爲は、悉く男性的の立脚地より批判せられつつあるなり。

◆

幸福の秘訣は、己自身と和合することなり！

◆

歌の唄はれざりしものこそ、實に永久に尤も妙なるものなり。

◆

審美的の感情は、個人を迷しむるが如く、國家を惑しめず。

◆

今人々は學びの道に身を委ね、生活の道を顧みず。——さてその結果の如何なるものなるかを省察し給へ！　吾人は幾百の半熟としか思へざる才能ある人々が、堂々自己の理想乃至感情を有しながら、その事業、その風習に至りては、全く打つて變りたる有樣なるを目睹す。

◆

空虛なる胄、鍔もなき劍、柝もなき楯、——かかるものをこそ榮譽とは云ふなり！

◆

幸福が我等を訪るるは、恰も春の洪水の如し。

若しも藝術中の新なるものが人心を收攬せんとせば、そはある程度までは同時に古からざるべからず。何となれば、そは發明すべきものにはあらずして、再び發見すべき性質のものなればなり。藝術は人民の傳襲產たる思想の範圍を脫し、又は奇異の感を呈するが如きことあるべからず。傳襲的なる思想の內に、國家の力の大半は根差しゐるなり。

社會の柱は則ち自由と眞理を愛する精神なり。

罪惡と、虛僞と、空虛と、而して又虛妄の因襲と、憐むべき怯懦とを

もて、過去は博物館の如く吾人の後方に橫りて、吾人に敎へを垂るべし。

我等の悲歎を救ひ得るものは、女人の泪、號泣にあらず。我等は男兒の勇氣と力を要せり。

彼は彼の祖先の思想に私淑し、彼の祖先の意見を繼承せり。——さればにや、彼は精神的に平民なるなり。

民衆の詩は、その哲學の如し。

今の世は、作家は歴史に對する該博なる智識を有せざるべからず。然らずんば、彼は自己の時代の狀態、自己の時代の人間の行爲、その基因を、極めて不完全なる、皮相的なる以上に批判することを得ざるなり。

思ひ出の内に、多くの傷しき悔恨の念の混りをらざる者、この世にありや？

公衆は新しき思想なぞは要しをらざるなり。公衆は既に所有しゐる、善き、古き、認識されたる思想に仍て傳かれをれり。

眞理と自由とに對する尤も危險なる敵は、『結束したる群集』なり。

文明は、恰も『生長』の順程が、次第に小兒を變化せしめ、開發せしむるが如く、人類を開化せしむ。卽ち本能性は弱化し、推理的の才能は生れ來るなり。『大人』は人形を弄ぶ技能を失ひたり。

一人の男兒は、他人の生涯の事業の爲に死すことを得べし。されど、彼にして若し生きをらば、彼は先づ己自身の爲に生存せざるべからず。

予は『指導者』なるものを嫌忌す。予は生涯の内に、彼等のごときも

のを多々目撃せり。されど彼等は新しく放養せられたる羊の如く、あらゆる所に害毒を及し、自由なる人間の道を塞げり。

眞理は常に群集に屬せりと云ふは虛僞なり！　群集の把持する眞理なるものは如何なるものぞや？　そは陳腐なるものにして、最早歲月を經て腐蝕せるにはあらずや！　眞理も苦むしたる時は終に虛僞となるべし。

尋常に組成せられたる眞理なるものは、先づ十七年、十八年、多くて二十年、稀にそれ以上壽命を保つことあり。されど、かかる古びたる眞理は、恐しく憔悴しるるが常なり。

ある新しき貴族は生るべし。その貴族は、名門の者にもあらず、富豪の出にもあらず、又はかの才能、學藝に仍て輩出するの類にもあらざるなり。將來の貴族は、則ち心と意志とに依りて生るべし。

支配權を有する群集は、個人に對して、ある任意的に規定したる範圍以外に、決して信仰乃至言論の自由を與ふるものにあらず。

人は己の過去を忘れ易きものなり。

爾が欲するがままの人物を捉へて、その良心を解剖し見よ。爾は少

くとも、彼が秘めざるを得ざる一個の暗き班點の潜めるを認むべし。

平和！

ふふん、百性が最後の矢を放ちたる時、狼が牧羊場より最終の羊を盗みたる時、彼等のあひだには平和あるべし。されど平和なる奴は、まことに奇しき友誼なり。

爾の所有物にして只一つ爾が放棄し難きものあり。そは爾の心内の自我なり。

爾はその『理想』なる外國語を敢て用ふること勿れ。吾人は自國語に

て、『虚僞』なる適切の詞を有せり。

藝術家が社會に負ふ所あるにはあらずして、社會こそ藝術家に負ふ所極めて多大なるなり。この立脚地は、予は思考するに、あらゆる著名なる藝術家が自己に對し、また自己の職業に對し、當然有せざるべからざるものなりと信ず。

畫を翫賞するは消化に極めてよろし。

予はこの Munich 市に來りて失ひたるものの内、尤も大なるものは海なり。こは予に執つては償ひ難き損失なり。

地を這ふものの内にて、人のたましひの營養となるべきもの有や？

たましひは天に向き、太陽に向つて憧憬するものに仍て生長をなすにはあらずや？

理想を憎むこと勿れ。理想は身自らを殘酷に罰すべし。

人は只單に智識を鵜飲みになさんとして研究をなすものにはあらず、則ち己に執つて利益なるものを收めんがためなり。

海外に於て名をなすことには、勿論ある滿足すべきものあり。されど、そは予には何等の幸福をも齎さざるなり。あゝそれらのものの總ては、終に何の價値あるものぞ？

わが心を察し給へ。心裂けんとする時には、富も只淋しき慰安を與ふるのみなり。

啻に作す者のみならず、讀む人も亦詩人なり。彼等は正に合著作と稱すべく、又彼等は時に詩人より詩的なること往々あり。

予は常に書翰上の友誼なるものには滿足し得ざる者なり。そは予に執つては何時も何となく物足らなく、虚僞らしく思はるるなり。

只小兒の小き世界のみ、詩の金色の輝（かがやき）に滿てり。

自意識は尤も嚴正に、自己と、自己の衡動と、自己の行爲とを解剖すべきことを促せり。人はこの解剖の結果を考量することに仍て、初めて自己の性質に對し、可なり明確にして正當なる解釋を下し得べし。

予があらゆる思想界の領域に於て把持せる根本的の主張は、卽ち少數者は常に正義なりと云ふことなり。

そが傷ける時、野鴨は底に潛りて、堅く水草を嚙み、其所に纏結して、再び浮び來らずといふ。

音樂は歌劇（オペラ）のたましひにして、歌詞（リブレット）はその體軀なり。

家庭は社會の中心なり。

幸福は諸（もろもろ）の哲學の最終の目標にはあらずや？　然して幸福なるものは、則ち己自身と相隔和すべきことにはあらずや？　鷲は果して金色の翼を得んとするか？　獅子は果して銀の爪を欲するか？　また柘榴の樹は果してその實に燦爛たる寶玉を結ばんとするか？

事業は予の一の喜なりき！

幸福とは、先づ何よりも第一に、自己の無垢に對する、靜かなる、喜ある、牢乎たる自負なり。

智惠の樹の熟さざる實は、人目を引くには餘りに青過ぎたり。

そなたは如何にして戀なるものが生れ出づるやを知れりや？　そは槲實（はゝそのみ）の如く、長き歲月を經、夢と、悲みと、歌とに仍て孕（はぐ）まれて發育し、然る後俄かに蕾を開き、その瞬間にそなたの心の內に深く埋

沒するなり。

獨り孤然として生ける者は、地上にて尤も强き者なり。

足下は大洋に生活する者が、全然別種なる人種の如き觀を呈しをれるを見ずや？　彼等は恰も、海の生活それ自身を身自ら體現せるが如し。則ち彼等の思想と彼等の感情には、海の動搖あり、——その干潮と滿潮は彼等の內に行はれるなり。

理解乏しき者の眼には、予が好んで、自ら企圖する所ありて、自らの家庭と和合せず、また予は自ら彼等を隔離し居れるが如くに映ぜり。

されど予は信念を持ちて斷言せん。右の如きことは、先づ第一に動すべからざる狀態と、種々なる事情に基くものにして、隔離の根本的の理由は將に此所に存するなり。

否、憎惡の焰は決して手易く消ゆるものにはあらず。愛は一時に炎え上り、また滅すべし。されど憎惡は炎え立ち、炎え昇り、終には復讐となるべし。

男は彼の愛する者の爲にすら自己の名譽を犧牲にするもの絶えてなし！　されど、幾百萬の婦女子はこれをなせり！

死とは何ぞや？　これ則ち取りも直さず、恒久に變轉し往く塵泥（ちりひぢ）の國へ對する吾人の借金の支拂ひに外ならずや？

予の書きたる總てのものは、ある確たる企圖より成る意識的の想念をもて作（もの）したるにはあらず。予は多くの人々が思考せらるるが如き社會的哲學者よりも、寧ろ遙かに詩人なりしなり。

獨逸の劇文學は活人畫の如く、佛蘭西の劇文學は恰も油畫の如し。

國民的の文學は、日常生活の些々たる描寫の如きものに仍て發達進歩を見るべきものにはあらず。眞に一國の代表的作家と呼ばれん者は、

自己の作品を山嶽、溪谷、巖多き丘陵、砂多き海邊の音樂と相結ばしめ、更に我等の心の奥底なる心琴に觸るることを辨へざるべからざるなり。

人間の尤も不名譽なる罪は、友誼に對する裏切りなり。

爲したること、既に過ぎ去りたることを考ふるの要なし。

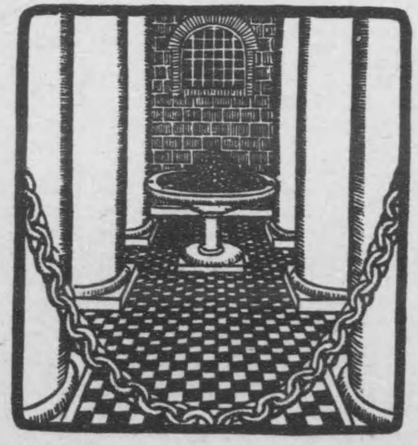
世には自己の專問とせる藝術に於て、自己を表現すること能はざる爲に、自ら大眞面目に、力み返りて、己は特に批判家として天賦の才あるものなりと自負するが如き者多々あり。

價値ある目標に向つて進み行く人間の諸〳〵の努力は、これを『事業』と名付くるの價値あり。

恐怖、希望、失望。――この三個の詞に人の一生は盡きたり。

オスカア・ワイルド

箴言集



オスカア・ワイルド

オスカア・ワイルド小傳

詩人、戯曲家、小説家にして、"Salomé" "The Soul of Man" "The Importance of Being Earnest" "De Profundis" その他の美しい傑作佳什の著者として、普くその名を知られたるオスカア・ワイルドは、千八百五十四年十月十六日、愛蘭土の Dublin 市に生れた。彼は初め Enniskillen なる Portora Royal School に入つて修學した。後 Dublin 市の Trinity College に入り、此所で奬學資金を受けた。彼はこの學校に於て千八百七十四年希臘語に對し Berkeley 金牌を得たが、また Oxford の Magdalen College に入るに及んで、此所でも千八百七十六年古典學で首席を占めた。翌々年の千八百七十八年には同校に於て Litera Humaniores の一等を得、同年また詩 "Ravenna" を作して Newdigate 賞牌を贈られた。

彼はその前半世は非常に華かな生活を送つたが、一度猥藝罪に問はれて獄屋

に投ぜられてからは、前の親友知己も一人として顧るものなく、加ふるに多年の遊蕩は身體に殃をなし、終に千九百年十一月三十日、不遇落寞の中に佛蘭西の巴里で客死した。彼の亡くなつた所は、Hôtel d' Alsace, 13 Rue des Beaux Arts, Paris であつたが、彼が瞑目した後その旅籠屋の亭主が彼の部屋に這入つて見たらば、所持品としてはほんの鞄一つで、その鞄の中には、古い新聞紙と只一册の Paul Verlaine の詩集があつたばかりだといふ。彼の亡骸は翌月の十二月三日 Bagneux の墓地に葬られた。

千九百九年七月二十日、彼の遺骨は Bagneux の墓地より更に Père Lachaise に移されたが、其所には彼を記憶する新しい碑が建てられた。

世界の呼んで不徳の書となすものは、乃ち世界の耻を曝したる書なり。

眞實、情緒、力、――小說に於て、これより上乘なるものはなし。

嗚呼世に痛苦程大なる神秘はあらじ。

貧者の内優れたるは、感謝を知らざる者、彼等は常に無感謝、不滿、不從順にして、而も叛逆的なり。——さもありなん、あるべし。

極樂鄕（ユートピア）を含まざる世界地圖は、瞥見の値だになし。

何事にまれ、四分の三以上の英國民と意見を異にせる時は、そは何より正氣なる證據。精神的懷疑に陷りたる時の尤も深き慰安の一なり。

戀はよし。されど友情は更に高し。まことに世にいみじき友どちの仲ほど高く貴きはなけん。

人は漸く物を知り初むる程に老ゆれば、物を知らず。

燕尾服を纏ひ、白き襟飾（ネクタイ）をなさば、如何なる人間も、株屋に至るまでも、開化せりとの稱揚を受けん。

眞理は稀に純にして、而も單純なることなし。

思想の價値は、そを言ふ所の者の誠心に仍て定らず。

老寄の藝術觀は常に屁の如し。

われ〳〵は互に人生の秘密を求めて暮す。さて人生の秘密とは、藝術の内に存するにはあらずや。

❧

萬に物知りなる人の心ほど恐ろしきものなし。恰も骨董店の如し。怪物も芥も、すべて普通の値段以上に張られたり。

❧

人一物の爲に死すとも、必ずしもその物の眞なるを要せず。

❧

たましひは恐ろしき實在なり。それを購ふことも得べく、又交易をなすことも得べし。

❧

青年は誠實ならんとして誠實なる能はず。老人は誠實なからんとせども能はず。

❧

諸の女、なべて彼女等の母の如くに化す。これ彼女等の悲劇なり。男は然らず。これ彼の悲劇なり。

❧

人は人生の色に心を用ふべし。されど決してその細目に意を留むべからず。細目は常に野卑なり。

❧

藝術の評價は氣分の問題なり。教理の問題にあらず。

❧

英國民は、一般に藝術の作者には無頓着なり。但し問題となれる作者が、不道德と叫ばれたる時、初めて注意を喚起す。

老者は總てを信じ、壯者は總てを疑ひ、而して青年は總てを知る。

權威を行ふ者の存する所には、又權威に反する者存す。

苦痛はこの世の盟主、その網を逃れ得る者一人もなし。

多くの人は、不健全なる、誇張的なる利他主義に仍て、彼等の生活を損ぜり。

女再婚せる時は、乃ち彼女が先夫を嫌忌せるが爲なり。男再婚せる時は、乃ち彼が先妻を愛慕するが故なり。

商業と雖も繪畫的背景を要す。

舞臺は餘りに空想的なるもの、隱所なり。

貧者の眞の悲劇は、彼等が自己の否定より外に、何物も提供し能はざることなり。

理想は危し。現實の方未だ勝れり。現實は往々人を傷くれども未だ勝れり。

女は吾人をば恰も人道が神を遇するが如くに遇す。彼女等は吾人を崇拜し、常に吾人を惱して、何事か彼女等の爲に爲さしめんとして歇まず。

聖く尊きものにこそ觸るる價値あれ。

人戀すれば己を欺くに始まり、人を欺くに了る。

青書（ブルー・ブック）（英吉利の政治錄）は、概して退屈なる讀物なり。されど愛蘭土に關する青書（ブルー・ブック）は常に面白し。同書は近世歐羅巴の大なる悲劇の記錄なり。同書の內にて、英吉利は己自身に對する公訴狀を書し、又世界に向つて、己の恥の歷史を曝せり。

この廣い倫敦に、話せる女五人しかなし。而もその內の二人は、お行儀好き社會には入れられざる代物。

今の世は、人諸（もろ〳〵）の價を知りてその値打を知らず。

政府の爲したる誤謬の結果には、まことに讃むべきもの多し。

己を知らんと欲せば、先づ他人の總てを知れ。

世に尤も困難なるものは獄長を濟度し、獄卒を教化し、教誨師を基督教に導く事ならん。

一派を成すものは風格なり。

良き小説家は、善き息子よりも稀なり。

世界は賢者の住む爲、癡愚に仍て造らる。

人氣とは、乃ち世界が惡藝術に冠する月桂冠。

死の猶及ばざるものに藝術あり。

結婚生涯も亦慣習の一つ。

獄屋に繫るるも人間は猶全く自由なるを得べし。彼のたましひは自由なるべし。人格は傷けらるる事なく、平和は攪亂せらるる事なし。

普通の新聞紙は藝術に關する記事を掲載すべからずといふ法律なか